

1921 廿五
(大正十)

京橋 → 房州 → 上海へ

典獄

右者役出獄ヲ許ス

教誨師

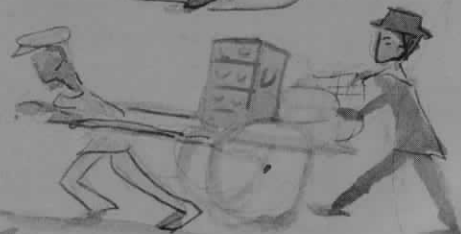
工賃積立100円也ヲ支払フ



和田久さん
来ニをうながしに
来る



吉田公
入露を
勧告に来る



短井尼の助力で
山科脱出



菜食主義流行 — 満一年がく張る

十二月十日「労働新聞」発行

1922 上海へ

上海へは来たが
徳田球一に撒



黄凌霜
疲米する
佩蘭の紹介

A. F. 葉は...
oath

"It is too religious"



凌霜



桑名連

ケースの前には...
改定の前には...
改定の前には...

山鹿泰治 人とその生涯

向井

孝著



メーデーのかえりに 1951年・京都

山鹿泰治・人とその生涯 目次

一 はじめに..... 五

知行合一の死 生き方としてのアナキズム エスペラントとアナキ
ズムの生活者..... 二五

二 エスペラントとの出会い（一九〇七―一一）..... 二四

生い立ち 草創期の日本エスペラント運動 有楽社時代 築地活版
に入る 日本で最初の外人とのエス会話 相坂信との奇縁..... 二六

三 アナキズムとの出会い（一九一一―一三）..... 二六

大杉との密会 キリストとの訣れ 印刷工原田新太郎 要視察人と
なる 電気工になって大連へ 満鉄大連発電所..... 二六

四 中国のアナキズム運動（一九二一～二四）……………三六

はじめての上海行 民声社の秘密印刷所 中国のアナキズム運動
師復の生涯 師復以後の中国

五 大杉を助けて（一九一四～一七）……………四〇

近代思想の集まり 月刊平民新聞の苦闘 発禁号を撒く 最初の秘
密出版 短刀とピストル その頃のエスペラント運動 北一輝宅へ
の居候 尾行刑事の仲人で結婚 葉山事件と山鹿 兄たちの死 京
都の米騒動

六 二度の上海行（一九二二～二三）……………七〇

二度目の秘密出版 禁固三年 獄中余聞 山科の隠れ家 二回目の
渡支 AFと大同党 三回目の渡支 北京無政府主義者連盟 上海
での旅券入手工作

七 関東大震災前後（一九二三～二四）……………九二

総同盟事務所襲撃 大杉虐殺と海外通信 骨箱とピストル 第四次
労働運動の頃 泰山鳴動ブリキ罐の中味

八 闘いの日々（一九二四～二七）……………一〇〇

AFILのスカップ 第六回メーデー副司会者 マラテスタの軟禁
日ⅡエスⅡ文Ⅱ英会話と辞書 高橋光吉の渡支 命名山鹿大次郎
黒連と白連 第五次労働運動での仕事 汎太平洋労働組合会議での
紛議 サッコⅡバンゼツチ救援のために 第四回目の上海行 国立
上海江湾大学 国際工団主義のために 脱走兵赤川啓来

九 小金井時代（一九二七～三九）……………一二六

小金井の家 紀北長島の生産学園 パーテンダーになる チブスと
幻想 SATとTLES ランティの来日 スペイン革命 世界語
『老子』 南国への脱出

一〇 台湾とフィリッピン（一九三九～四五）……………一四〇

日本の最南端高雄 上海の張維賢 台湾単式印刷会社 フィリッピ

ン上陸 マニラのエスペランチスト 日比小辞典の刊行 大次郎の死 台湾自由社など

一一 日本アナキスト連盟と共に (一九四六・七〇) 一六

京都でのアナ連大会 エス語版平民新聞 世界市民運動 連盟代表として 戦争抵抗者インターへの加盟 アナキズム第七号 第四回アナ連大会以降 病中記 印度紀行 WRI第一〇回大会 たそがれ日記 近藤憲二と山鹿

思い出 山鹿みか 三五

父のこと 瀬川アイノ 三六

おわりに 向井 孝 三六

△付▽ 山鹿泰治年譜 三〇

一 はじめに

知行合一の死

一九七〇年二月六日早朝、山鹿泰治は千葉県市川市中山の寓居で、一庶民としての七八年にわたる生涯をひっそりと終えた。近隣の人たちにとって、その目立たぬ、静かな死の唯一の奇異は、葬儀らしい気配の一切がなく、弔問者もまばらに來ては去り、こぞって出棺を見送るという風がなかったことだろう。

その翌日正午をやや過ぎて、病院車が一台やって來ると、遺体はベッドから寝棺に入れて移され、居合わせた七、八人の者に見守られながら、すぐ走り去っていった。そして数時間後、白木の箱包みが還ってきたが、もちろんそのなかに遺骨などはいっているべくもなかった。なぜなら山鹿は、永年の知己で同志でもあった順天堂医大椿教授に依頼して、彼の遺体を学術解剖の資に提供することを、生前から手配していたのである。このように山鹿は、自己の遺体をもっとも合理的に処理することによって骨も肉も一切を地上から消滅させ、あわせて葬儀の必要もないものとして死んだのである。

彼が書いたものに、次のような文章がある。

——死体は焼却するのが衛生上最良の方法だが、カトリックでは神のつくった人体を焼くのは罪悪と考えて土葬にする。エジプト人は死体が腐らねば、いつか生き返るものと思ってミイラにしたため、防腐剤クレオソートを発明した。また、肉の燻製発明のもとなった。インドでは死体を石でつぶし、ダンゴにして鷺にくわせる風葬、河に流してワニにくわせる水葬もあった。抹香や線香をもやすのは、死人の魂が煙と共に天へのぼると思った一方、死臭を消すためもあったらしい。

南米インデアンは、ある秘法で死体を小さく人形のようにして保存するものがある。東京の科学博物館にその実物が陳列されている。

私の友人浅井恵倫君は人類学者だが、フィリッピン山中にすむ小人ネグリート族の頭骸骨を手に入れるため、行商人になって部落へはいり、雨夜ひそかに掘りだしたそれを椰子の実の中にかくして持ち出した。いまも台北大学にあるはずだ。

人体が科学その他に役立つのは、死後まだ組織が新鮮なうちだけである。ただ骨は、スケルトンに組み立てて、ほとんど消耗品として、いくらでも要求されているので、私はすでにその寄附を約束している。死ねば腐る人肉数十キロは、そのとき無用の廃物である。肉をはぎとって骨格をとる以外に仕方がない。脳は巧みに保存すれば、死後でも交話できる方法がみつかるかもしれない。が、どうせ長持ちしないから、一時的に死亡前の記憶を引き出す位のことだろう。

人々が灰になってなお魂魄があるとおもうのは、生きているときの人間の自慰と我執であり、

その幻影であるにすぎない。それなのに死者のために大きな墓地をつくったり、葬儀をやったりすることは、一切無益無用のことである。

彼はこのほかの文章でも、とくに墓地は生産に有用な土地を無駄にしてしまうものとして、その必要を主張している。

さて、この明確な唯物主義と、死というものに対する淡々とした事務処理の、日常時と変わらぬあつけなさは、まさに彼の終焉にふさわしいものであった。そしてまた、彼の生涯のさまざまな行動と仕事にわたっての、一貫したあり方であり最後のまとめでもあった。

△生き方Vとしてのアナキズム

一九六〇年、六八歳になった山鹿は、自分の肉体的条件から判断して最後となるであろうインドへの旅を思いたった。

このインド旅行の発端となるエピソードひとつをとってみても、山鹿の面目は躍如たるものがある。彼はそれを、次のように語っている。

——インドのマドラス州ガンジグラムで、戦争抵抗者インターナショナル（略称WRI）第十回大会が開かれることとなった。

私は自らその代表になることを希望した。しかし第一は金の問題である。……第二の問題は、すでに七〇歳ちかい体で私がインドへ行くというのだから、いろんな人が心配してくれた。もう数年来、脳溢血で病床にある近藤憲二君に、ある人が「あの年で山鹿は本気でいくつもりだろう

か」と聞いたらしい。「山鹿が行くといったら、とめられぬ。必ず行くだろう」と近藤君は即座に断言したそうだが、まさに心底まで知りあった知己の言であった。

その近藤君に、私はつい申しわけないことを言ってしまった。かつて近藤君は、荒畑寒村が社会党の東洋大会でインドへ行ったときの苦しい経験を知っていた。私が報告をかねて病床を見舞うと、彼は「金のないインド旅行が、予想以上にどんな悲惨なことになるか」と、しきりに自重をすすめた。私はおもわず、

「金もない。体もよくない。年もとりにすぎている。それだからこそ今のうちにいくのだ。君みたいに自重していて病気で倒れたら、もうどうにもならないではないか」「そう言われると、俺は一言もない……」と寝たまま握手の手をのばしてきた。その思いきりぎゅっと握りしめた手のぬくみが、いまでも心に残っている。

山鹿はこのインド旅行で、大会第二日目に日本を代表し、とくにエスペラントで演説を行ない、満場の拍手をあげた。それは一九二五年（大正一四年）の東京メーデー副司会者として壇上に立ち、デモの先頭にあって官憲の妨害とたたかったとき、および一九二七年（昭和二年）中国から招かれ、上海労働大学開校式に、全土からよりすぐった若い革命家の卵七百余人の前で挨拶をし、エスペラント語を教えた半年間とともに、生涯にまたとない晴がましい一刻であったにちがいない。

それはともかく山鹿のこのインド行きは、日本アナキスト連盟国際部の責任者として海外同志と数十年來連絡をとってきた一つの決算として、さらにWRI大会にあつまる各国の運動家との交流にあわせて、日本の運動を国際的展望のなかへ押し進めることを意図した。ついで大会終了後インドを縦

断して、ガンジーが残した非暴力運動の實際をみることに。とくにビノーバ翁やその周辺の人達と会って、土地解放運動とその実践組織ピースアーミー（平和軍）の現状に学ぶこと。さらに、セイロン等をふくめて各地のエスペランティストと交流すること。最後に（これはのちにはつきりしたことだが）その帰路、ホンコンの旧知の同志に依頼して北京の胡愈之に手引きを頼み秘かに中国へ入ること。そして、中国の奥地に昔の仲間張景などの行方をたずねながら、新中国の文化大革命の事態と動向に接すること（印度からの郵便がおくれ、連絡がとどかなかったのか、結果として達せられなかった）などの目的をもっていた。

このような気配をうすうす察して心配した山鹿の家族たちは、出発したままひょっとして帰る気がないのでは……と、彼に何度も問いただし、必ず戻ってくることを約束させたのだった。

しかし本当のところ、往路の日程はおどろくほど細密に計画され、資料によって確かめられていたが、日本へ帰る日取りははじめからなかった。ゆけるところまでゆきついて、その先はわからん、だめな時は戻る、というのが、山鹿の考えであったと思われる。

現在八山鹿文庫Vとしてある彼の遺品中には、インド行きのためにつくられたと思われる彼の手稿やノート類がある。語学関係だけでも、自家製日印辞典・印日辞典・必要印度語会話集・単語集・ヒンズー語文法・速成タミル語・渡印ノートなどがあり、その他英文図書・刊行物・新聞切抜き・邦文印度案内・ガンジー研究書・地図・印度民話集等、びっしり書き込みのあるものが二十数点に及んでいるが、一体いつどのようにして、このような準備をしたのかとおどろくばかりである。

こうした山鹿の中国入りの計画は、一見無謀な思いつきのように見えるが、例えば一九二二年（大

正一年）吉田一の手引きで、徳田球一から資金を受け取って入露するという事で上海へ飛んだとき（これは徳球が金を渡さず、とうとう果たせなかった）の前例にもみるように、どのような機会をも有効につかまえることにおいて彼はすぐれた行動力を示した。

事実、山鹿のおどろくべき身の軽さ、実行のすばやさ、いくつかのエピソードとなつて、いまも残っている。それは常に身边が整理され、具体的にいつでも飛び出せる用意がなくては、出来ないことであつた。例えば、一九二二年（大正十一年）大杉栄宛にベルリンのアナキスト大会への出席要請が届いた。その旅券入手が日本ではむずかしく、大杉が旅券を中国でとる仕事を山鹿に相談すると、もうその翌日、山鹿は汽車で広島あたりを走っていた。下関―釜山―新義州―奉天―天津、そして六日目にはもう北京にいて、景梅九らと折衝をはじめているという風だった。

山鹿は、生涯に三十数回居住を移しているが、彼にとつてはもともと自分の移り動くところが、自己の生き場所であり、また死に場所なのではなかつたらうか。それゆえ彼の移動―旅も、その一泊一泊においての移住であり、生活日常とつづくものに外ならなかつた。だから一カ所での数年の定住も、彼にとつては、八日々の旅Vであつたということであり、そして、新しい苦難や予期せぬ出来事は、旅ゆえにでなく、どこでも起こりうる日常の現象として、身構えることなく受けとめ処理されるものであつた。その日常の日々あらたな出来事のために、いつでもそれを受けとめる周到な用意が、彼の生活そのものとしてあつた。

その用意は、単に受動的なものとしてでなく、苦難に対して積極的なあの冒険家たちの好奇心と、未知の世界への夢となつて、彼の新しい旅立ちに拍車をかけるものであつた。

エスペラントとアナキズムの生活者

山鹿泰治の生涯について、これらのことをひとつひとつ述べていくなら、数百枚をついやしてもまだ不十分だろう。しかし、晩年最後のインド旅行の一部だけを見ても、おのずから彼の生涯とおしと具現した彼そのものとしての生き方が、はっきりとうかびあがってくる。

第一に、それはきわめて明晰な合理主義ともいふべきものである。しかも山鹿においてのそれは、一見単純明快なそれそのものに見えていながら、その基底にまったく矛盾対立するもの――例えば、合理主義と結びついた近代科学が未だ到達しえない不可知の世界や、神秘と夢の、無限の未来空間をつねに一方でみつめていることにおいて非合理主義ともつながり、また一転してアナルコ・テクノクラシーや、エスペラントの言語学的主張ともなるものであつた。

第二にそれは、楽天的とも言うべき行動主義である。彼の決断の早さ（行倒れの思想Vともいうべき実行の身軽さは、定評があつた。しかしその一見、行きあたりばつたりに見える行動主義とは対極的に、彼は生活者として良い腕をもった印刷工であり、さらに運動のなかの細心地道な実務家として、緻密で迅速な事務処理の工夫と独創にみちたやり方では、また群を抜くものがあつた。彼が国際部を担当していた一九五〇年代、年一回のアナキスト連盟の大会における国際部報告は、年間数千通に及ぶ着発の郵便物数とその内容、使用済外国切手の売却処分まで詳細をきわめて、つねに全員を讃嘆させたことなど、いまなお語り草である。

この相矛盾するような二つのものの、山鹿における一体化的あらわれは、まさに山鹿が終生、生活

者として、労働の場を持ちつづけたことと深く関連している。事実、彼は生涯を通じて労働者であった。肩書きや職業の欄に、労働者・印刷工と書くことを至上の誇りとし、役付や上役になることを望まなかった。

労働者にして、一方でハ主義者Vであることは——今もかわらず当時としてはなおさら——きびしい現実との相剋のなかで、日常生活の上にハ運動の日常化Vをつくり出すことにほかならない。つまり山鹿にとっての革命運動とかアナキズムの意味は、つねに自・他のハ生き方Vハ生きざまVとして、その日々の生活日常と密着してあるものであった。山鹿においては、むしろその身辺日常の微視性こそが、彼の壮大華麗なハ革命的夢Vの巨視性をつくり出すものであった。

第三に、山鹿はなによりもエスペラントとアナキズムのふたつを、不可分一体のものとして、その一身に具現した。そのことが前述の、合理主義者であり行動主義者であると同時に、その対極の夢想家であり地道な実践家であらしめたとも、またそのことによっていよいよ、エスペランチストアナキストたる山鹿の一生をつくり出したともいえるだろう。

それは、彼が決していわゆる学者・指導者の立場をとらず、エリートとして行動しなかったことにより、彼のエスペラントとアナキズムがむしろより広義の意味で庶民大衆のハ生き方Vハ生活の技術Vハ生きる智恵Vとして、日々日常の生活の上に、それそのものとして展開されたのだといえよう。しかも私たちは、ひとりの人間においてエスペラントとアナキズムが、このように見事に結びついた例をかつて見たことがないのである。

こうした山鹿の七八年の生涯は、日本においてほとんど相前後して明治末期に出発した——エス

ラントとアナキズムという——二つの運動の草創期から併行するものであった。(日本エスペラント協会がつくられ発会式を開いたのは、一九〇六年(明治三九年)六月一二日である。また、アメリカから帰った幸徳秋水が神田錦輝館で「世界革命運動の潮流」と題して直接行動論をはじめて展開したのは、同年六月二八日のことであった。)彼はその二つにいちばやく関係することによって、彼自らがその運動の歴史をつくる部分となり、担い手ともなった。従って彼を語ることは、また二つの運動史をその初期から、しばしばひとつのものとして語ることに於いて、他にみられない特色と重要な意味をもつと言えるだろう。

山鹿は、インドの旅を終えた八カ月後の一九六一年二月脳出血で倒れ、一時小康を得たものの、再び起つことができなかった。

しかし幸いにも初期の病臥中の生活は、彼の生涯にわたる思い出や随想などを書きつづけた『たそがれ日記』と名付ける手稿を残す機会となった。全部で九一篇のそれは、思いかぶるままに、その時時、五年間にわたって書かれたものであるために、しばしば重複したり、記述に乱れがみられる部分もある。本稿は、できるだけ山鹿のかき遺した文章を活かしつつ、その抄出、要約、また若干の補訂を加えたものによって、その人と生涯を浮き彫りにしようとしたものである。従って、とくに断り書きのない引用は全て山鹿のものである。しかし、もちろん文責は筆者にある。